

Development of Several Art Programs Aiming at Symbiosis Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大杉, 健 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/647

共生社会を目指した造形プログラムの開発

Development of Several Art Programs Aiming at Symbiosis Society

大 杉 健^{*}
OHSUGI Takeshi

1 はじめに

障害者の権利に関する条約の国連における採択、政府の障害者制度改革の動き、中央教育審議会での審議、障害者基本法の改正などを受けて、近年、小中学校をはじめ各種教育現場において、インクルーシブ教育に関しての関心が高まってきている。平成29年度には、教育現場での障害のある人の採用実態の調査が行われたり、公立小学校においては平成30年度までに、障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備の一つとして特別支援教室の全校配置などの対応が進められたりしている。また、この分野の研究としても、障害者教育、ユニバーサルデザイン、インクルーシブ教育など様々な言葉を使いながら多くの研究がなされてきている。その一例としては、障害者にどのようなサポートを行ったらいかなどの障害者支援の研究、教室環境を障害者に合わせてつくり直したらよいかなどの研究、障害者や周囲の人々が共に生きるインクルーシブな社会を目指して学校現場の教育システムの在り方の研究などが見受けられる。

本研究では、視覚障害者と周囲の人が造形表現を通して、どのように関わることができるのかを学習者からの視点から取り上げる。これまで行ってきた造形活動の題材から、視覚障害者と共通の表現の楽しさとして味わうことのできる題材を開発し、その実践事例を通して、共生社会を目指した教育における造形活動の在り方を提示していきたいと考える。なお、共生社会を目指した教育については、様々な言葉で語られることが多い領域である。言葉の内容も次第に拡大してきており、それぞれの言葉の内容が重なる領域も増えてきている状況である。したがって、本研究では、共生社会を目指した教育という言葉を使い、これらの内容を包括して取り扱うこととする。

2 研究方法

本研究では、視覚障害のある人とそうでない人が共に楽しみながら造形表現をする題材の開発を目指している。つまり、視覚障害のある人もそうでない人も造形的な学びでは、同じ学習者であり表現者であるような題材の開発である。そこで、第1に、感触を扱う題材の実践事例を取り

^{*} 武蔵野大学教育学部兼任講師

上げ、造形表現活動が「共生社会を目指した教育」にどのように関わられるのかについて考察する。

第2に視覚障害のある作家、光島貴之氏の作品や活動を取り上げ、鑑賞活動をすると同時に光島氏の一つの制作プロセスであるテープドロ잉を題材化して取り組み、その表現活動の試みについて考察する。第3に、視覚障害のある人とそうでない人が同時に鑑賞できる作品展示方法を活用した鑑賞事例を考察する。

3 触感を扱う題材の開発

造形活動の中心的な活動の一つに、ものを見て、感じて、表現するという活動がある。そして、この活動の中心をなしている行為の一つが「ものを見る」という行為である。視覚障害のある人にとっては、ものを目で見ることが困難な場合が多い。しかし、そこには、豊かに感じる触感の世界があり表現の世界がある。触感でもものを見て、感じて、表現することを楽しむ活動が可能である。

手でものを触った時の感じを五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）でいうと触覚ということになる。しかし、私たちが実際にものを触った時には、ザラザラしている、凸凹しているなど形状的なものを触覚として認識しているだけでなく、それらがもっている柔らかい、冷たい、重い、大きいなどの様々なイメージも同時に感じているということを経験的に理解している。したがって、本研究では触覚と区別して、これらの経験やその類推から生まれてくる感じも含め、触感という言葉で取り扱うことにし、この触感を扱う題材の開発を試みることにする。なお、触感という言葉については、仲谷正史・寛康明・白土寛和氏共著『感触をつくる』¹の中で、科学的な見地より触感にアプローチしているので、その文章を一部、引用する。

わたしたちが触感を得る過程には、モノ、身体、心的イメージの三つの段階があります。まず、触る対象であるモノがなければ、触感は生じません。実際にはモノに触れず頭の中で想像するだけの場合でも、触るモノを感触と一緒に思い浮かべるはずです。モノに触れて触感を得る時には必ず、身体を媒体とします。この時、身体の部位や動き方によって、モノとのインタラクションに違いが生じます。当然、そこから得られる触感も異なります。触り方は人それぞれ癖がありますから、同じモノを触っていても、人によって異なる信号が脳に届いているはず。脳に集まってきた信号は、一つの心的イメージとして、意識に上がります。この心的イメージこそが触感です。

この仲谷氏らの考え方は、造形表現の要素としての触感に置き換えても成り立つ。つまり、私たちがものを感じ特定のイメージをもつという時には、触覚だけではなく他の複数の感覚やこれまでの経験を複合してイメージを作り上げているのである。そして、私たちはそのイメージを使って表現活動を行っているのである。例えば、さわやかな風を感じその流れをスピード感のある曲線で表現したり、ものの重さを無彩色の絵の具で方形を描き表現したりしているのである。

3-1 『凸凹コレクション』

<学習の状況>

A：実施学年：小学校第4学年 3クラス

活動時間：90分

た あ	(L)	うす間にしずめて 一底がぬけるがゆい		い え	別
凸凹コレクション	(H)	縁が横に重なるたあ な凸凹も収まるに と縁のゆきより厚さ との紙の向きによて印 象が定まるのがゆい られた。		内	別
	M				
	L				

＜集めた凸凹コレクション＞

何を？	オノマトペの表現	大きさ・硬さ・暖かさなど
マンホール	くるくる	大きくやわらかい
研究室の看板	ボコボコ	太陽のような暖かさ
マンホール	マルモリ	大きい、硬い

1/13

コレクション

5555

① 校庭の地蔵

② 小さい庭がわつまっている。
庭じ。

③ うち車道の(り)に
にしていた。

5555

① 新こうしゃの外装
かいだん

② おひくべいきたいに

③ おひくべいの(り)の
まわりにしてはいる。

④ 校庭の
ていし。

7
12

① 21にたいにある
ていし。

② 21にたいにある
ていし。

③ 21にたいにある
ていし。

– 113 –

子、床、などをすぐ触り始める。全員で触って、「これはザラザラ」「これはツルツル」「これは、ごつごつ」とオノマトペ的な表現も使って友達とコミュニケーションをとり、自分たちのお気に入りの触感を探していった。図工室の中の壁や床、機械の表面などを触り終えると、次は廊下、校庭、裏庭と場所やものを変え、様々なものを触り触感の世界を楽しんでいた。そして、みんなで選択した凸凹を最後は墨を塗り、集めたコレクションを鮮明に浮き上がらせその時の触感を振り返る活動を行った。また、ワークシートにまとめる活動では、集めてきた凸凹コレクションを振り返り、「冷たい感じもした」「思ったよりもでこぼこしていた」などの感想を言葉で表現したり、「おせんべいの中身みたい」「上履きの底みたい」とその感触を類似の感触のものに置き換えて表現したりする児童もいた。

大学生では、「最近、何か触って覚えている感覚はありますか」の問いに対して、大学生の反応は薄く、「特にない」という答えが一番多かった。実際には小学生に比べると、より多くのものを触り、感じ、その経験を積み重ねてきているはずである。そこで、大学生の場合は、両方の手を横の人とつなぎ合い、一人一人の手の触感が違うことを意識することからこの題材の授業を開始した。この活動で出された意見は、手の大きさの違いだったり、柔らかさの弾力の違いだったり、思ったより暖かかったという温度の感覚だったり、掌と指、爪などの質感の違いだったりした。つまり、この導入は、触感には視覚だけでは、把握しきれない数多くの情報があり、その触感の違いを感じることは楽しい活動であることを体験する活動となった。導入後の凸凹コレクションの活動については、ほぼ小学生と同様である。身近なものから周囲の世界へと触感のコレクションを広げていった。しかし、コレクションの内容面では、大学生なりの特徴を見ることができた。形や触感の同様なものは避け、できるだけ異なるものを意図的に集めたり、フロッタージュの大きさを工夫したり、紙の上に現れるパスの跡などを想像しながらコレクションしたりするなどの表現活動が見られた。

大学生のワークシートでは、小学生と同様にオノマトペ的な言葉に置き換える表現をするほかコレクションした凸凹で触感をまとめるケースも多く見られた。また、例えば「針金のように固く冷たい」とか「タコの足のようぐにゃぐにゃしている」と具体的な比喩を交え細かな触感の違いを類推する活動も見られた。

<題材の考察>

この題材の中心活動は、①ものを手で触り、自分たちが見つけた触感やそのよさについて友人と話し合うというものである。ものを見たり表現したりする場合、視覚に頼っていることが多く、思いのほか触感を使っていないことに本題材に取り組んで気づく学習者が多かった。同時に、触ることにより普段ただ漠然と見ていたものが違って見え、新たな感じの発見につながったりしていた。一方、視覚障害のある人は、そうでない人に比べて、触感から情報をえていることが多いと考えられる。つまり、触感を使って発見したことを友達と話し、その触感を共有したりする活動は、視覚障害のある人とそうでない学習者が一緒になって楽しく活動することのできる題材として取り組めるものであると言えよう。

以下は、大学生のワークシートからの抜粋である。

- 触ることにより、ものの大きさ、硬さ、暖かさなどを感じることができる。

- 目の見えない人は、その分、指でとらえる能力が優れていると思う。一緒に楽しんで活動することができる題材だと思う。
- フロッタージュで視覚化したりオノマトペの表現で、そのものの感触をイメージしたりすることができる。
- 普段何も感じずに触っていたものでも、今回のように意識して触ってみたりフロッタージュの表現で写し取ったりすると様々な凸凹があることに気が付いた。

3-2 液体粘土による平版

この題材では、液体粘土を使用してやや厚みのある平版を作成することにより、平面に表現した作品を視覚障害のある人と共に鑑賞し合える題材として開発した。

<学習の状況>

A：実施学年：小学校第4年学年 4クラス

活動時間：60分

B：実施学年：大学生（教育学部）2クラス

活動時間：90分

<活動の展開>

- ① 湿らせた黄ボール紙に液体粘土を指や手を使って、画面全体に伸ばす。
- ② さらに液体粘土を足し、指跡をつけて思い思いのイメージや絵を描く。
- ③ 描いた絵やイメージを別の紙に平版の技法を使って写し取る。
- ④ 乾燥した作品を、目または指や手を使って鑑賞する。



写真5 指や手をリズムカルに動かして表現したいイメージを描く

<活動の実際>

液体粘土は、クリーミーで自在に伸ばすことができる材料である。はじめの活動としては、両手を使って液体粘土の感触を楽しみ様々な指跡をつけたりしながら、全体に広げる活動である。この活動は、小学生も大学生も同様に、液体粘土の感触を十分楽しみながら取り組んでいた。

次の活動は、偶然できた模様や自分が意図したイメージや絵を指跡などで描き平版として刷る活動である。ほとんどの学習者が抵抗感なく、



写真6 指を使って思い思いのイメージや絵を描き、平版の技法で写し取る

描きながらイメージを展開し複数の作品を制作していた。また、描画については、指だけでなく身近にあるフォークなど他の道具を使って連続的な跡をつけたり、絵の具を混ぜて色のある版を制作して楽しんだりしている学習者もいた。以下大学生のワークシートからのコメントを抜粋する。

- 道具を使わず手で直接描くことから、版の材料の素材の触感を十分楽しみながら制作することができる。
- どんな障害をもっている、この活動は制作を楽しめる活動であると思える。手先が器用でなくても表現することができ、楽しめる。
- 目が見えない人でも、手の動きで思いを表現できるのではないか。
- 変形自在に作成でき、何度でも繰り返し作成できること、色を付けることもできることなど、自分の思いどおりに表現できる表現方法だと感じた。

<題材の考察>

この題材で使用する液体粘土は、滑らかで誰もが自由に表すことができる素材であり、また、手で撫でれば一瞬でまた元の地に戻すことができ、何度でもやり直しのきく素材でもある。また、紙との相性も良く平版で用いても、乾くとある程度の強度も生まれ、手や指でその凹凸を感じることができることも特徴のひとつである。粘土などの立体的なものと異なり、平面的な表現は、視覚障害のある人にとっては、難しい面が多いが、本題材では、様々な障害のある人とそうでない人が同時に取り組むことができ、お互いにその制作過程を楽しむことができる題材となっている。手や指の感覚や動きで、渦巻きや勢いのあるまっすぐな線などの全体のイメージを把握しながら表現することができる。また、作品の鑑賞においては、液体粘土のもっている厚みが手助けとなって、視覚障害のある人もない人も同じ作品を鑑賞することができることも、この題材のよさとなっている。課題としては、テーマの設定に両者が共通して取り組める内容にするなどの工夫が必要である。視覚障害のある人にとっての課題としては、自由に描ける反面、絵を描こうとした時にどの部分を自分が表現しているのか、その把握が難しいことが挙げられる。また、乾くまでに30分程度の時間が必要で、表現してすぐに鑑賞を共有することができない点などが課題である。



写真7 白い液体粘土の部分が少し盛り上がって、手で触ると描かれているもの確かめることができる



写真8 手や指の触感で、イメージを表現する

4 光島貴之『木の耳』の鑑賞から

ここでは、全盲の作家、光島貴之氏の『木の耳』の作品の鑑賞と光島氏が行っているテープドローイングを取り上げる。この作品は、東京都、府中市美術館の屋外展示作品として設置されている。

<学習の状況>

A：実施学年：小学校第3学年 3クラス

活動時間：鑑賞20分、粘土制作45分

（粘土制作は、自分なりに感じた木の耳をつくる）

B：実施学年：小学校第6学年 3クラス

活動時間：鑑賞20分、テープドローイング45分

（テープドローイングのテーマは各自で設定する）

C：実施学年：大学生（教育学部）2クラス

活動時間：スライドによる鑑賞15分；粘土制作45分；テープドローイング45分（粘土制作は、掌の中でつくるいろいろな顔、粘土百面相。テープドローイングのテーマは各自で設定する）

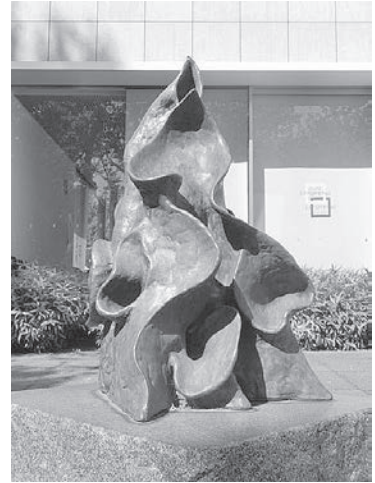


写真9 木の耳
光島 貴之作 府中市美術館

<活動の実際>

事例A、Bはいずれも小学生の活動であり、府中市美術館の実際の作品を鑑賞することから活動を開始している。作品を前にして、まず、目に入ってくる作品「木の耳」で対話による鑑賞を行った。

A：「ぐねぐねしている」

T：「どのあたりが？」

A：「上から下まで全体的にぐねぐねしている」

B：「生きものみたい」

T：「例えばどんな生き物？」

B：いかとかたことか」

C：「ソフトクリームみたい」

D：「触ってみたいくなる」

様々な感想が語られた後、自分の手で触って鑑賞する。

一つのクラスでは、目クラス全体で、目で見ることから鑑賞したが、別のクラスでは、目を使わないで一人ずつ、触ってみることから鑑賞した。触ってみる鑑賞では、一度に多くの人が触ることができないので、時間がかかるだけでなく友達と感想の共有という点でも難しかった。触っている部分の形状によって感想も異なってくる。「ぐねぐねしている」「先がとんがっている」「穴



写真10 手で触って鑑賞する

が開いている」などは、異なる意見がだされそれを共有するには意見の対象になった別の場所を触る必要があった。また、全体の形状や大きさについては、両手で鑑賞しないとわかりづらいこともあり時間的な課題を残すことになった。ただ、その待っている時間を活用して、近くの木を触って鑑賞し、木の節の丸みや穴などの形が作品ととても似ていることなどをテーマに迫るための鑑賞をすることができた。

一方、事例Cの大学生の活動では、実際に作品を見に行くことはできず、「木の耳」の写真をプロジェクターで投影しての鑑賞となった。この時の初めの一枚は、作品のみの写真を使用した。多くの学生からは等身以上の大きさ、2から3メートルの大きさを感じていたという意見が多く出された。その後、他の小学生が作品に触れている写真を見ることにより、実際の大きさや作品の形状の概要を把握することになる。大学生の粘土を使った取り組みでは、掌サイズの粘土で手の感覚を十分生かし、様々な顔をつくる取り組みを行った。この活動を通して、盲目の表現者の作品をそうでない人が鑑賞することや作品に触って楽しむ鑑賞方法があることを知る機会とした。



写真11 タイトルにもなっている木を触って鑑賞する。節の丸みや穴が耳のようにも感じる

<テープドロ잉>

盲目の作家、光島貴之氏の一つの表現方法として触覚絵画²がある。これは光島氏はラインテープやカッティングシートを使用して絵画的な表現を試みた表現であるが、本事例のB、Cでは、ラインテープより厚みのあるマスキングテープを使用して、テープドロ잉に挑戦した。マスキングテープは、厚みがありしわをつくったりすることもできる素材である。事例Bの小学第6学年では、20ミリ幅のマスキングテープを使用し、事例Cの大学生では、より細かな表現を試みることを予想して10ミリ幅のテープを使用することにした。また、今回の活動では、手で見ることをねらっているが、アイマスクなど使用せず、目を閉じたり顔を上に向けたりと各々が自分なりの行いやすい方法で手の触感に集中する方法を考えて活動に取り組んだ。

<活動の実際>

この活動では、あらかじめどのようなものを表現するのかそのテーマを考える必要がある。また、それはどのぐらいの大きさに表現するのか、場所から描き始めるのかを決めたりするプロセスも必要になる。この過程は他の絵で表現する活動と同様である。したがって、活動のは



写真12 目ではなく手の感触を楽しみながら制作する

はじめは何を描こうか迷い、ゆっくりとしたものとなった。また、ドローイングの開始は、画用紙の隅からどの程度はなれているかで手で測り位置を決定しマスキングテープを張り付けることになり、初めての体験で難しく感じていたようだ。ただ、このテープドローイングでは、途中の段階を手で見ることができる利点もある。どの程度、出来上がっているのか、何が足りないのかなどを確かめながら制作を進めることができるところは、いつも絵画表現と同様である。

活動後の小学生児童の感想では、約7割の児童が難しかったと答えたが、約3割の児童は思い通りに制作することができたと答えた。また、チャレンジして見たいかという問いに対しては、6割の児童がもう一度、やってみたいと答えていた。大学生のワークシートからのコメントでは、小学生同様、活動の難しさを挙げているものも多かったが、反面、視覚障害のある人が表現することの大変さやその表現の面白さを理解できるというコメントも寄せられた。

<出来上がった作品を手で鑑賞する>

出来上がった作品を友達同士、交換して鑑賞する活動をこのプログラムの最後に実施した。作品の上下も分からず掌を使って確かめたり、時には指先を使ってテープの跡を追いかけてたりして、何が表現されているのか想像しながら鑑賞した。表現されたテーマは、具象的な表現だけでなく、抽象的な表現も含まれており、テープの微妙な凸凹や特徴的な形などから、表現者が表したかったものを想像しながら鑑賞した。全く異なったことを感じた場合もあったが、多くの場合、表現者のテーマと鑑賞者の感じた内容は一致していた。なお、友達同士が同じ作品について会話するときは、作品を目で見ることなく受け渡しを行い互いに手で見たものや感じたことを話し合っていた。

<題材の考察>

このテープドローイングの活動は、視覚障害でない人にはほとんど経験のない表現方法であるために難しい活動となった。しかし、小学生のアンケートにあるように表現の面白さがこの題材にあり、何回か経験することによって自分の思いを表現することができるようになることも予想

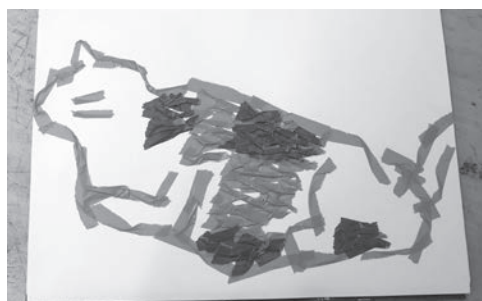


写真13 猫
大学生の活動では、表現に合わせて、小学生より細いテープを使用する



写真14 友達の作品の鑑賞も手の触感で味わう

される。また、学習者が視覚障害のある人の表現を理解したり、一緒になって表現を楽しめたりできる点では魅力的な表現方法であり効果的な題材である。

＜大きさについて＞

これまで、触感を扱った題材をいくつか紹介してきたが、プログラムを開発するにあたってその大きさは重要な要素となり検討が求められる。例えば、平面的な活動として平版やテブードロイングなどでは、紙の大きさが大きすぎると全体を把握することができない。また、紙の大きさが小さすぎると表現できる内容が限られてしまっているように表現をすることができなくなってしまう。初めて活動する時の良好な紙の大きさは、両手で全体が把握できる大きさ、つまり、両手を広げたぐらいの大きさが一つの目安となる。また、液体粘土のように、自由な動きの表現の場合は、その倍、つまりハツ切り画用紙大が適当であった。また、立体の粘土の表現の場合も同様でその扱う大きさは重要である。粘土百面相のように、ごろんとした小さなサイズで活動する時は、掌で包み込める大きさが適切であり、小学校第3年生で取り組んだ大きな取り組みでは、おおよそ、両手で抱え込める大きさが一つの目安になることが活動事例を通して検証することができた。



写真15 紙は全体が把握できる大きさ

5 山本正道「春に寄せて」の鑑賞

府中市緑町の交差点脇の小公園に設置

＜学習の状況＞

実施学年：小学校第6学年 3クラス

活動時間：30分

町中にあるパブリックアートの鑑賞である。この「春に寄せて」の作品は、公共の大きな空間を利用した作品とその傍らに、手を伸ばすとちょうど触れることができる位置に小さな同じ作品が設置されている。小さな作品には、点字でキャプションもつけられている。視覚障害者とそうでない人が同時に同じ作品を鑑賞できる工夫がなされた展示である。



写真16 春に寄せて
山本正道作

＜活動の実際＞

3人のペアをつくり、一人は手で作品を見ながら、他の二人は目で作品を見ながら、見たものや感想を話し合う鑑賞活動を行った。(Aは目を閉じて、手で鑑賞、B・Cは目で鑑賞)

A：手前に何かあるね。
B：それは少女の像だよ。
A：なるほど、座っているのかな
C：右を向いて座っている。
A：向こうに向かって地面が膨らんでいるね。
B：あっ、本当だ。少し膨らんでいる。
C：奥に、丸い形のものがあるよ。触ってみて。
真ん中に穴が開いているよ。
A：あ、本当だ。雲みたいな感じがする、
B：ふわふわの木にも見えるよ。
A：だからかな。少女がいて、木があって、な
んだか優しい感じ。平和ないつもの時間と
いう感じがする。

両手で抱え込める大きさまでの立体作品では、触ることが可能であれば、先述の『木の耳』のように、視覚障害のある人も両手で触ることによって鑑賞することができる。しかし、それ以上の大きさ、空間を活用した作品については、視覚障害のある人が鑑賞しようとした時には困難が付きまとう。したがって、事例のような鑑賞活動は、どの作品についてもできるという活動ではない。しかし、この『春に寄せて』の作品のような展示方法が増えれば、障害のある人とそうでない人が同時に作品を見ることができ、会話し鑑賞を楽しむ活動が可能になると考える。このような展示が増えることを期待したい。



写真17 手で触りながら、目で見ている友達と感想を話し合う

6 おわりに

本研究では、視覚障害者とそうでない人が一緒になって造形表現を楽しんだり鑑賞を楽しんだりできる題材を小学生、大学生の学習者の視点で開発し、考察を行ってきた。これらの題材においては、学習者が目を閉じるなどして視覚障害のある人になり切ることで、障害のある人の造形活動のよさを理解することを試みて、その有効性を考察している段階である。今後の研究では、実際に視覚障害のある人と一緒にこれらの題材を実施することにより、さらに題材を有効なものにしていきたいと考えている。また、共生社会を考えた時、視覚障害だけでなく他の障害等の事例も考える必要がある。まずは学習者の意識を変革する題材の開発の研究から始め、共生社会を目指した造形プログラムの開発を行っていききたいと考えている。

註

- 1 岩波科学ライブラリー 187 感触をつくる 《テクタイル》という考え方

仲谷正史、笥康明、白戸廣和 著 第2章 触感を知る 13p16行から14p7行までを引用

2 光島 貴之（みつしま たかゆき）

府中市美術館展覧会図録2001「私にできること～みる、きく、ふれるの探検」7p

「触覚絵画」という言葉は便宜的に光島がよぶようになったものではあるが、触覚によって鑑賞する絵画、もしくは触覚によって制作された絵画のことを指している。